Nara Women's University

# 萬葉集字余りへの射程



| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者: 奈良女子大学21世紀COEプログラム<br>公開日: 2011-04-20<br>キーワード (Ja): 字余り, 脱落現象, 非字余り<br>キーワード (En):<br>作成者: 毛利,正守<br>メールアドレス:<br>所属: |
|---|---|
| URL | http://hdl.handle.net/10935/2722 |

# 萬葉集字余りへの射程

毛利　正守

ただいまご紹介いただきました大阪市立大学の毛利でございます。今日は「萬葉集字余りへの射程」という題で、講義として90分間お話をさせていただきます。

皆さんのお手元の資料に入る前に、少し、萬葉集の字余りというのは従来どのように考えられ、またどういう問題が現在あるのかという、そんな辺りからまずお話をしたいと思います。

萬葉集は、短歌、長歌、そのほかもあるのですが、大体五文字、七文字を基本形式とする定型詩だということです。けれども、ときに字余りをきたす場合があります。この字余り現象について、色々と中世あたりから論じられてきているのですが、ある意味で本格的に究明しましたのが本居宣長です。宣長は次のように言っています。「歌に五文字、七文字の句を一文字余して六文字、八文字に詠むことある。是れ、必ず中に右の『あいうお』の音（おん）のある句に限れること也」と。もう少し続いて述べていますが、このようにまず句の中に「あいうお」の母音があると言う。「え」については言っていません。そしてその後、「え」はどう考えたらいいかという問題も現在あります。中世までは字余りをどのように捉えてきているのかということになりますと、歌学書などでは和歌の病の八つあるうちの一つに挙げています。たとえば、特に字余りの場合は「これは深き病にあらず」、「それ咎（とが）にあらず」というような表現があり、その内容については、「させるようなく」、つまり字余りというのは「させるようなく、余さでもやすくありぬべからぬところにわざとたたみ入れて余すことは悪ろし」というような表現や、「殊更よしなきときは余すべからざるか、無用の字を余すことよろしからず」というような表現があります。あるいは、「文字余りたる古歌もあれど」、つまりこういうふうに詠めばいいんだというような言い方で「すべらかに詠まれてこそあるように覚ゆれ」や、あるいは「歌は三十一文字あるを、三十四文字あらば悪しく聞こゆれども、よく続けつれば悪しとも聞こえず」。この「続けつれば」というような所に一面を取られたところもあろうかという感じはありますが、特に「母音が入っていて」ということは言っていないのです。それに対して、宣長は字余りのものの中には母音を含んでいることを見抜いたということになります。

その後、研究はいろいろ進められてきています。その場合にどんな問題点があるのかということですが、まず、なぜ母音を含むと字余りを生じるのかという問題があります。それから字余りというのは、いったい定型を破っているのかどうかという問題もあります。古事記、あるいは日本書紀の歌謡には五・七になっていない所があります。文字が余るほうはあまりなくて足らないと言うか、四文字、あるいは六文字というものがあったりします。それに対して、萬葉集は大体定型だと言われているのですが、それでは、字余り、即

ち五の所が六、七の所が八というような字余り、これは定型を破っているのかどうかという問題があります。それともう一つは、句中に母音を含んでも、実は字余りを生じないものと生じるものがあるという点です。これも一体、どういうことなのか。宣長は「あいうおノ音ノアル句ニ限レル」と言いました。しかし字余りはそれ以外にも、ほんのわずかですけれども母音を含まないものもあるということについてはその後もいろいろと論じられているところですが、ほとんどは母音を含む場合です。しかしながら、今度は逆に母音を含んでおればすべてが字余りかと問い返しますと、そこに字余りとそうでないものがある。では、これはどのように考えたらいいのかということがあります。母音を含みながら字余りになるものとならないものの違いはどこにあるのか、その違いの基準はどういうところに求めたらいいのかという問題であります。およそこうした三つの大きな問題点があろうかと思います。ではまず、資料の１ページ目の所から見ていくことにします。

最初の所に一、「句中の母音（V)・・・字余りと非字余り」、二、「句中の『子音＋母音』(CV)・・・非字余り」、三、「句中の『半母音＋母音』(V)・・・字余りあり」というふうに挙げています。一は句の中に母音を含んでいるもの。これには（１）（２）で字余りになるものと、ならないものを挙げました。二は句中に母音がなくてすべてCVの句であります。三は、句の中に半母音＋母音、特にヤ行ですが、それを含んで字余りになるものです。母音を含むものよりは字余りになるのがずっと少ないものです。字余りは大体、短歌、長歌合わせますと、全部で二千余例あるわけです。短歌だけですと、大体1700例ほど。それに対して、半母音＋母音の場合は何10例だけがあるという少なさですが、一応半母音＋母音も字余りがあるということになります。

一の（１)、「鶏が鳴く　東をさして　ふさへしに　由可牟等於毛倍騰（ゆかむとおもへど）　よしもさねなし」。これは東国、あずまを指して、次の「ふさへしに」というのは大変難しい言葉ですが、釣り合うようなかたちでとか、似合うかたちでそこへ行こうと思うのだけれども。「よしもさねなし」は行くすべ、手立てもありませんという意です。この歌の四句目ですが、「由可牟等於毛倍騰」の「お」が入っていて、これが八文字になるということであります。二番目の例は「秋萩に　恋尽くさじと　思へども　思恵也安多良思（しゑやあたらし）　またも逢はめやも」。秋萩に心が奪われまいと思うのだけれども、「しゑや」、ままよ、いや、非常に見事過ぎて放ってはおけない。「またも逢はめやも」はこんな秋萩に再び会えはすまいということ。四句目は、「思恵也安多良思」の「あ」を含んでいます。しかしながら、この場合七文字であるということです。この二例だけをとってみてもなぜ一方は字余りであり、もう一方は字余りでないのかという問題があるわけです。

二は句の中に母音が入っていないもので、句の頭の母音〈ア〉は違います。「うちひさす　都の人に　告げまくは　見し日のごとく　安里等都気己曾（ありとつげこそ）」、これは特に「安里等」の「と」というように、「由可牟等」の「と」と同じ例を挙げました。この「安里等」が「都気己曾」の「つ」というCVに続きますが、この場合、字余りを起こしてはいません。

それから、「我が背子が　来むと語りし　夜は過ぎぬ　思咲八更々（しゑやさらさら）　しこり来めやも」。この場合の「思咲八」も先の「思恵也」と同じものを挙げましたが、この場合は「更々」に続き、先の例は「安多良思」に続きますが、どちらも字余りにならないということになります。

それから三の例が半母音のものです。「伊弊尓由伎弖（いへにゆきて）　いかにか我がせむ」と続き「伊弊尓由伎弖」は仮名書きであります。このように「尓由」という所の「ゆ」、ヤ行の半母音、これで字余りになっているのです。「我が背子は　玉にもがもな」云々と。そして結句ですが、「手尓麻伎弖由可牟」、やはり「由可牟」という例で字余りということになるわです。

こういうふうに見ていきますと、子音音素がだんだんないものほど字余りになりやすいとまずは大雑把に言えそうです。母音の場合、結局二千余例字余りがあり、そして、半母音の場合は数十例ほどです。そして子音＋母音は基本的に全くありません。子音音素がだんだんないものが字余りになるのではないかと、まずはそんなことが言えるかと思います。

四の所ですけれども、橋本進吉氏『国語音韻の研究』（「国語の音節構造と母音の特性」）という大著の中で、「字余りを生じる際の母音は一つの音節として十分な重みをもっていなかった」のではないかという捉え方があります。それで結局、五に書きましたのが今言った母音（V）、それから半母音（S）、それから「子音＋母音」（CV）とだんだん字余りのない方向にあると言えます。即ち、五の（1）萬葉集中、字余りを生じるのは、その大部分が句中に母音（V）を含む場合、（2）次に字余りになりやすいのは、句中に半母音（S）を含む場合、（3）「子音＋母音」（CV）ばかりの句は、基本的に字余りなし（非字余り）であるわけです。そうしますと六、「子音の音素が弱化されていくほど字余りになりやすく、また、字余りを生じる母音は、一つの音節としての重みを持っていなかった」とまとめることができます。次に、一つの音節としての重みを持っていないというのは、それはいったいどういうことかということが問題となります。

七に入る前に、次のような問題があります。字余りになるものは定型を破っているのかという問題であります。資料を離れますが、ちょっと考えてみたいと思います。何しろ先程申しましたように、萬葉集は、古事記、日本書紀よりはずっと五・七という定型が確立しているわけです。その場合、ほとんど句中に母音を含むものばかりが字余りになっているわけですが、もしもこれらが不定型だということになると、母音を含むものばかりが不定型ということになってしまいます。文字の上で見ていきますと、今の例の一の（1）、「由可牟等於毛倍騰」の「お」というのは母音ですが、文字としては「子音＋母音」の文字と同じく一文字であることに変わりがありません。そうすると表記の上で考えますと、文字上、母音を含む文字のものばかりが二千余例にもわたって定型を破っているということになり、これは甚だ考え難いことであって、この想定には無理があります。

そこでどのように考えたらよいか、であります。これは書かれていないものをある程度

考えないといけないという問題に直面してきます。つまり、音声の方の問題があるわけです。これを無視して文字の問題ばかりでいきますと、今、何度も言いますように、母音を含むものばかりが不定型となり、これは考えにくいわけです。文字であるが故に、考え難いということがあり、実際に歌われている、あるいは音声の上での問題をどうしても考える必要があるということになってきます。

それと関連して、七を見たいと思います。これは服部四郎氏という言語学の大家であった方ですが、この七の所で何を述べておられるのかと言いますと、服部四郎氏は『言語学の方法』(岩波書店、昭43)の中で、いわゆる母音というものは、CVというのが普通のかたちであるのに母音だけがVだけなんだろうかという疑問を持たれました。母音でもCVではないか。その母音の前に子音があるのではないか。そういうことを考えられました。その例を五つ挙げています。(1)、「赤」と言う時の「あ」という発音、これは「あ」の母音の前にアポストロフィエス/'/で記してあるのですけれども、これが要するに有声喉音音素、喉の所で調音される子音があるはずだという論であります。「'aka」と。もう一つの例も「赤々」という時のその三音節目も一音節目と同じように「あ」('a)は子音を持っているはずだ。これは音声の上で現代語で考えていくことができるわけです。それで、古代の音声をそのまま復元することはできませんが、通時的にみて基本的に変わらないものがあるだろうと考えられます。その場合に現代語が大いに参考になってくるわけです。(3)、「小鬼」の場合の「お」、これも「お」は子音音素を持っている。そういうのに対して、(4)と(5)、これがたとえば「航空」という時の二音節目の「お」、初めに括弧で書いているのは音声記号です。それから斜線にしているのが音韻記号です。音声記号ではよくこのように繰り返しの音を付けます。このように「航空」の「お」というのは「小鬼」の「お」とは違う音声を持っているはずだというふうにとらえ得るわけです。「航空」の「こお」の二音節目の「お」や「くう」の四音節目の「う」もそうです。もう一つの「お母さん」というときの三音節目の「あ」もそうです。

実は確かに、我々が発音する場合に「赤々」という時の「赤」のはじめを発音しようとする時に「お母さん」の三音節目の「あ」で発音しようとすれば、「ぁかぁか」('aka'akaではないakaaka)とこんな、力の入らない音になるはずです。「赤」、あるいは「赤々」というときに「ぁかーか」とは言いません。「あか・あか」('aka'aka)と言うときには喉頭の所にそういう調音があるはずだという捉え方であります。恐らく皆さんもやってみたら分かると思いますが、「お母さん」のその三音節目の「あ」から単語を続けようとしましても、できないはずです。ここの所について服部四郎氏は大変大きな発見をされたと思います。これは亀井孝氏も認めておられます。そういうことで古代語についても、現代語で考えたもの、その音声をある程度、応用していく必要があろうということであります。そこでどういう場合に字余りになるのか、どういう場合に母音を含んでいても字余りにならないのかという問題をこのあとで説明したいと思いますが、簡単に述べておきますと、

結局は「お母さん」の三音節目の「あ」及び「航空」の二音節目の「お」や四音節目の「う」のような状況のときに字余りになるのだということです。

それで八の例を見てください。これは亀井孝氏「国語の変遷と歴史」(『国語学』17、昭和29)もア行音をハ行音と対立させて服部四郎氏と同様の見解を示されているということ、有声喉音音素を認めたということであります。九の例でそれをちょっと考えていきますと、

(1) 天離る 比奈尓安流和礼乎(ひなにあるわれを) うたがたも 紐解き放けて 思ほすらめや(17・3949②)
(2) ～玉鉾の 道はし遠く 関さへに 敝奈里氐安礼許曾(へなりてあれこそ)～ (17・3978、長七)
(3) 鶏が鳴く 東男の 妻別れ 可奈之久安里家牟(かなしくありけむ) 年の緒長み (20・4333④)
(4) 我が背子が 夜度奈流波疑乃(やどなるはぎの) 花咲かむ 秋の夕は 我を偲はせ (20・4444②)
(5) 梅の花 佐吉多留僧能々(さきたるそのの) 青柳は 縵にすべく なりにけらずや (5・817②)
(6) 世の中は 空しきものと 知る時し いよよますます 加奈之可利家理(かなしかりけり) (5・793⑤)

まず(1)、「天離る 比奈尓安流和礼乎(ひなにあるわれを)」、の「にあ」ということころです。もしも音声のうえで「比奈尓、安流和礼乎」と、このように切って発音しますと「赤々」と同じような「あ」になってしまいます。そうではなくて、「ひなにぁ」という「にぁ」という一続きになった状況において、この「にぁ」というのは文字は二つ、二文字だけれども、この「にぁ」で一音節となるというふうに捉えるわけです。そのように捉えないと、母音だけを含む二千余例が定型を破るということになってしまいます。そうではなくて「ひなにぁ」という「に」と「あ」が一つなんだと。音声のうえで一つなんだと。そうしますと、「比奈にぁ」で三音節で、「る」、「わ」、「れ」、「を」で七音節ということになり、結局音声音韻の問題としては、これはやはり同じ七音節の句である、定型は破っていないと考えられるということであります。

九の(1)(2)(3)は字余りの例を挙げました。(2)もちょっと見ておきますと、やはり「玉鉾の 道はし遠く 関さへに 敝奈里氐安礼許曾」の「へなりてぁ」、「てぁれこそ」。あともう一つ次の(3)も「鶏が鳴く 東男の 妻別れ 可奈之久安里家牟 年の緒長み」、「可奈之久安里家牟」、「かなしくぁ」というかたちで「くぁ」で一音節です。

これらは、実は萬葉集の中で一方に所謂脱落形が存在します。それが(4)(5)(6)で、(1)(2)(3)と対応させています。事実、この(4)の所は「我が背子が 夜度奈流波疑乃」と一字一音式で「なる」となっています。元はと言えばこれは「宿にある、萩の」となるわけです。この「にぁ」というのが一音節ゆえに脱落も起きやすいということが考えられるということであります。これがもしも、「ひなに・あるわれを」といったん、音の途切れを考えますと、「に・あ」というのが「な」にはなりにくいと思います。

事実、ちょっと飛びますが実際の例としまして、2ページの下のほうの十一の(1)。これはやはり「堀江より 朝潮満ちに 寄るこつみ 可比尓安里世婆(かひにありせば) つとにせましを」

（20・4396④）と七文字です。「可比尓安里世婆」と「にぁ」とはここは読んでいないのでしょう。これは日常の我々の会話においても、文節と文節とが一続きで発音される場合と音の途切れがあったりする場合とがあることを考えますと、それが古代においても懸け離れたものではなかったと考えられ、同じ「にあり」でも「可比尓安里世婆」、この場合は「に」と「あ」は音の途切れがあって、そこでは「にぁ」というように一音節を形成していないということになり、これはこのままで七音節の句だと考えられます。もう一つの（２）「障へなへぬ　美許登尓阿礼婆（みことにあれば）　かなし妹が」（20・4432②）の「～にあれ」の例も同じです。その一方でやはり、「比奈尓安流和礼乎」、「ひなにぁるわれを」という言い方、それが「夜度奈流波疑乃」を生んでいくのです。あるいは、九の例に戻って言いますが、（２）の「敝奈里氐安礼許曾」というのも一方に萬葉集の中に「さきたる」、「さきてぁる」というのは、「佐吉多留僧能々」というかたちであります。それから（３）の「加奈之久安里家牟」が、（６）のように「加奈之可利家理」というかたちで生まれてくるということになります。

十に挙げましたものはちょっと萬葉集から離れるのですが、十は「上代散文の脱落形」という例を挙げました。散文における脱落形を探すのは大変です。つまり、古事記、日本書紀等々、奈良時代のものは多く訓字で書かれていますので、なかなか萬葉仮名というものがないということもあって、それが実際訓字で書かれているのが脱落形を起こしているのか、あるいは起こしていないのかという判断は大変難しいのです。ほんのわずかの例ということで宣命や祝詞とかそういったものや、古事記の中でも仮名書きの所があったりします。そういう所でも脱落形が間々見えます。

では、和歌と散文とでこの脱落の問題を考える場合に同等に捉えてしまってよいかどうかという問題は、これはこれで大きな問題がありますが、少なくとも散文のほうにも脱落形はあるということで、（１）復可受賜物奈利世波（宣命第26詔）、（２）狂迷遍流頑奈留奴心（宣命第16詔）、（３）兵起尓被雇多利志（宣命第21詔）、（４）顕久出多留宝尓（宣命第４詔）を挙げています。まず（１）の例の宣命の26詔であります。「また受け賜はるべきもの奈利世波」と、この「奈利世波」の「なり」、「～にありせば」というところが「なりせば」となっており、これは脱落形と考えてよいでしょう。それから（２）につきまして、「たはむれまとへる頑な奈留（なる）」、ここですが「かたくななる」、「かたくなにある」の脱落形としての「なる」（なり）の例です。

（３）は、「兵を起こすに雇はえ多利志」、「雇はえてありし」、「雇はれたりし」。それから「出で多留宝に」というように、「出でたる」（「出でてある」の脱落形）と記されているわけであります。それでは、散文というものに字余り現象はあるのか。これについては散文にはないと言わねばなりません。それは散文では何文字かということに限定して書こうとすることはないはずです。定型の中に収める必要はないわけです。そういう意味で字余りという言い方での字余り現象というものはないわけです。がしかし、そういう字余

りという概念はないのですが、それに見合う音の途切れのない一続きで発音されるということ、それは音声を基にした散文の場合にも存したと言ってよいでしょう。あるいは記されたものをもう一回音声にした場合には、そこが一続きになる所とあるいは切れる所とがあるだろうと考えられます。字余りはないけれども、一続きという状況で発話される、それは散文でもあり得る。あるいは逆に、記されたものを発話するときにそういう状況で発話される場合があるということです。それ故にいわゆる散文の中にも脱落があるのだということだと言ってよいでしょう。脱落形が散文にもある理由をそのように持っていくことが必要ではないかと考えます。

さて、先程十一もちょっと見ましたが、十二に入る前に４ページの十五、「字余りの現れ方②」の所をお話ししておきたいと思います。これは字余りは句の中に母音を含んでいる場合に、字余りになるものとならないものがあるという問題が一方にあるわけです。それは萬葉集の中でどんなふうに現れているのかという、これがまた厄介な難しい問題でもあります。では十五を見る前にもう一つ見ておく必要があるのが、３ページの十三、「字余りの現れ方①」です。ここで（ａ）グループ、（ｂ）グループという言い方をしていますが、これが何かと言いますと、こんな面白い現象があるわけです。まず、（ａ）グループ。短歌だけで見ましたが、長歌もこれにかかわって言えるわけですが、今、短歌だけを見ることにします。（ａ）グループというのを挙げましたのは、短歌第一句と第三句と第五句、（ｂ）グループは短歌第二句と第四句。実はこのように分けますのは、句の中に母音を含みますと（ａ）グループ、短歌第一・三・五句、こちらがほとんど字余りを生じるという現象があるのです。（ａ）グループは句中に母音を含むとほとんどが字余りを生じる。それに対して（ｂ）グループの短歌第二句と四句は字余りになったりならなかったりする、むしろ少し字余りにならないほうが多いという面白い現象があるんです。これはまたどう解釈したらいいかという大きな問題があります。それは後で考えてみたいと思います。

それだけではなくて、もう一つ加わることがあるというので、十五になるわけです。４ページの十五、「字余りの現れ方②」を見てください。これが私が最も主張しているところなのですが、「字余りの現れ方」という所で、私は（ａ）グループ、（ｂ）グループに対して、更にそれをＡ群、Ｂ群と捉えています。Ａ群というのは、今言います短歌第一・三・五句がＡ群であり、それに更に加わることに短歌第二句と四句の句の終わりのほう、つまり五音節目の第二母音以下に母音が入っている場合には、この（ａ）グループと同じ状況にあるという事実、これを見いだすことができました。

短歌の第二句と四句の後ろのほうに母音がある場合、五音節目の第二母音という言い方をします。六音節目という言い方ではちょっと誤るということで、私は五音節目の第二母音以下という言い方をしていますが、その所のものを加えますと、Ａ群は90パーセント以上が字余りになっている。句の中に母音を含んだもののうちの90パーセント以上が字余り

ということです。ここに短歌の例を挙げました。母音を含んで字余りになるものは1476例、それに対して字余りにならないのはほんの85例。この85例もそれなりの理由を考える必要がありますし、また分かるものがいくつかあります。それに対して、B群、これは短歌の第二・四句の五音節目の第二母音以前にその母音が入っている場合でありますが、その状況においては字余りと字余りでないものとの現れ方は、むしろ字余りのほうがずっと少なくなっています。その数を短歌で挙げましたが、字余りは241例、字余りを生じないのは1189例。こんな現れ方です。これをどう解釈していったらよいかという大きな問題があります。特に五音節目の第二母音前後という問題があり、それが分かりやすい例は、３ページの十四の（１）から（８）までと、それから４ページの所の五音節目の第二母音以下、短歌第二・四句の問題です。そこで大きく違っていることの例を挙げました。それを見ておきたいと思います。

まず、十四の（１）から（８）までですが、ここには特に（ｂ）グループで五音節目の第二母音以前ではこんなふうにして字余りにならないのが多いという例で挙げました。（１）の例、「この川に　安佐菜安良布児（あさなあらふこ）　汝も我も　よちをそ持てる　いで子賜りに」（14・3440②）のごとく、「安佐菜安良布児」と七文字であります。「あ」というのが四音節目です。五音節目の第二母音より前です。そういう場合には字余りを生じ難い。それから二番目、「古ゆ　佐夜気久於比弖（さやけくおひて）」の「お」も五音節目です。五音節目の第二母音ではない。六文字目ではないんです。「佐夜気久於比弖」も字余りにならない。以下二句目と四句目に注目していただきたいのです。（３）、「ま幸くて　伊毛我伊波伴伐（いもがいはばば）　沖つ波　千重に立つとも　障りあらめやも」（15・3583②）、このように助詞＋母音でも五音節目の第二母音より前の場合、やはり七文字のまま。それから助詞の「の」の例、（４）、「君を待つ　麻都良乃于良能（まつらのうらの）　娘子らは　常世の国の　海人娘子かも」（５・865②）、あるいは（５）の「しましくも　比等利安里宇流（ひとりありうる）　ものにあれや　島のむろの木　離れてあるらむ」（15・3601②）、名詞とか体言とかそういうものですが、「比等利安里宇流」というかたちで字余りを生じない。（６）の「梅の花　知良久波伊豆久（ちらくはいづく）　しかすがに　この城の山に　雪は降りつつ」（５・832②）、（７）の「天地の　可美乎伊乃里弖（かみをいのりて）　さつ矢貫き　筑紫の島を　さして行く我は」（20・4374②）も同じく字余りを生じてはいません。

（８）がちょっと面白いと思います。「年にありて　比等欲伊母尓安布（ひとよいもにあふ）　彦星も　我にまさりて　思ふらめやも」（15・3657②）、この例を挙げましたのは、実は句の中に母音が二つ含まれるというもので、その場合にどんな状況になるかということです。「比等欲伊母尓安布」という「い」と「あ」の母音が入っていますが母音が含まれて九文字になるかというと、そうではなくて八文字です。では、どちらの母音で字余りを生じているのかという問題が出てきます。その場合、この五音節目の第二母音の前後ということが大きい一つの目安になるということがありまして、「比等欲伊母尓安布」という「い」のほうは五音節目の第二母音よりも前、それから「伊母尓安布」の「あ」、これは七文字目で六音

節目の第二母音とこの「あ」を言っているんですが、五音節目の第二母音以下であります。この「あ」で字余りを生じているのであって、「い」ではないということが分かってくるということであります。

（b）グループの場合、第二・四句において字余りを生じないのが多いのですが、この五音節目の第二母音より以前にあって字余りになるのはどんなものかということをちょっと見ておきます。短歌の第二・四句の五音節目の第二母音以前に母音があって、字余りにならないのは多いんですが、字余りを生じるものは、まずは句中に母音を含んでいるものの中でも特に先程から「比奈尓安流和礼乎」というような例を挙げましたが、この「あり」あるいは「といふ」というような「いふ」、あるいは「何々と思ふ」、「おもふ」、あるいは「いづ」というような単語の場合であり、そんなに数は多くないわけです。これがまた非常に興味深いことに、字余りというものは歌における問題といわゆる当時の音韻一般に還元することができる面とあるのですが、（b）グループの第二・第四句の五音節目の第二母音以前の字余り、即ちB群での字余りは、当時の音韻一般の問題と非常に関係が強いものがあるということが分かるんです。これが散文でも「あり」は先程「なり」とか「たり」とかありました。それから「といふ」が「とふ」とかそういうかたち、「おもふ」と「もふ」、というようなそんな言い方、「いづ」、どこどこに船出というようなかたちで「いづ」が「で」というふうになったりするということです。これが散文ですべてあるかというとなかなか出てこないものもあったりしますけれども、非常にそれに近いものが字余りになっているということになるわけです。だから注目すべきはB群なのだと。別の言い方をすれば（b）グループの五音節目の第二母音以前の母音の所は非常に注目していい字余りだということです。一般の音韻現象として考え得るところに通じるというふうに考えられます。

このほか、複合語の中に後項の母音が入っている時にこのB群では字余りを生じているということになります。この複合語というのも、散文においても脱落形が見られます。「めしあげ」というのは「めさげ」というようなかたちで出てきたりします。こういう脱落と関わる例の所と大いに関係しまして、巻十八の4129の第二句、B群の所ですが、そこの所で「とりあぐ」というこの言葉があります。「取り上げ前に置き」、これは先程とちょっと違いまして「取り上げ」の「あ」と、「前に置き」の「お」があり母音を二つ含みまして八文字ではなくて九文字ということですから、「あ」でも字余りを起こしており、「お」でも字余りを起こしているということになるわけです。その場合に「取り上げ」の「あ」は五音節目の第二母音より前ですけれども、やはり字余りになるのはこのように「とりあぐ」、「取り上げる」という複合語の中にあるということで考えられるというものです。B群で字余りになるものはA群でも字余りになります。これはあとでそれの関連を見たいと思いますが、B群で字余りを生じるものは非常に注目されます。

それから同じ巻十八の4124の歌の四句目です。B群で短歌第二・四句の所に「ことあげ」、

これも複合語。「ことあげ」という名詞形で複合の言葉です。五音節目の第二母音より前でもこういう複合語の場合には字余りが生じる。それからもう一つ。巻十七、4001番の第二句、「ふりおける」。「ふりおく」というこの言葉、このように複合語の中の後項に母音を含んだ場合B群ではありますが、字余りを生じるのです。これはまた脱落とも関わる、あるいは散文とも関わっていくという問題がある、B群の母音は音韻一般の現象として考えていくことができるのです。

では、資料のほうに戻りまして、4ページの所です。(b)グループであっても句の末のほうに母音がある場合はいろんなものが字余りになっていくという例であります。4ページの上のほうの(1)から(8)を見ておきますと、「隠り沼の　之多由孤悲安麻里　白波の　いちしろく出でぬ　人の知るべく」(17・3935②)の、「孤悲安麻里」の所、この「あ」というのは二句目ではありますけれども、文字としては六文字目で、五音節目の第二母音以下に「あ」があるということにおいて、これが八文字、字余りであります。

それから二番目も「隠り沼の　下の恋ひ余り　白波の　伊知之路久伊泥奴　人の知るべく」(17・3935④)がやはり六文字目、五音節目の第二母音以下に「い」があるということで字余り。あるいは助詞の場合に普通前のほうに母音がありますと、字余りを生じないのですが、(3)、「薪伐る　鎌倉山の　木垂る木を　麻都等奈我伊波婆　恋ひつつやあらむ」(14・3433④)というように「が」のあとの「伊波婆」の「い」はやはり字余りです。あるいは「が」でなくて「の」の助詞の場合、これも「多麻斯麻能有良尓」の場合、字余りを生じるということであります。あるいは(5)、「咲く花は　宇都呂布等伎安里　あしひきの　山菅の根し　長くはありけり」(20・4484②)というようにこの時も「あ」が五音節の第二母音で字余りですが、こういった例がほとんどを占めるわけです。(6)から(8)の「可奈之久波安礼特」、「安是可曾乎伊波牟」、「比等欲伊母尓安布」、これも同じです。「比等欲伊母尓安布」は前の(8)の所でもありましたが、ここでの(8)は「あ」のほうで字余りを生じているということで挙げております。そうしますとこうした事実は、一体、どういうことを意味するのかが大きな問題となるわけであります。字余りはそもそも音の途切れがない、そして一続きだということであって、その点から言いますと、五音節の第二母音以下、つまり、後ろのほうは、当時、歌として続いていく、一続きという状況で歌われたのではないか。たとえば今の(3)の例で言いますと、「麻都等奈我伊波婆」が、歌において「まつとながぃ」というような「が」と「い」が一つになるような、一音節になるような音声、これは事実を踏まえてのことですが、つまり、90何パーセント以上がこのようにほとんどが字余りになるということを踏まえて、音声においてそこが一音節になっているのであろうということであります。

そこで更に問題としてとり挙げたいのは次の点であります。A群とB群の関係ですが、B群というのは切れ目があったり、一続きの所があったり、それが一ヵ所であったり二ヵ所であったりするという状況で出てきます。つまり、字余りがあったりなかったりという

状況です。これは普通私たちが話すときに、続けて話したり、あるいは一続きではないかたちで話したり、音（おん）の途切れがあったりなかったりしながら話しています。歌ですので、話し言葉や会話とかと同等に考えることができませんが、上の事実を踏まえて言えば、B群というのはある意味で話し方に近いものがあるのではないかと考えられます。それはA群と比べてのことです。実はA群というのはどういうものかと申しますと、ほとんど全てが字余りだということです。この状況は、すなわちほとんどが「にぁ」というような状況であります。話し方において、いつも文節と文節が常に続いた一続きの状態で話をしているかというと、これはなかなか難しく、実際、そうい状況では話をしていません。今、このように私は話をしていますが、それこそ音の途切れというものがあります。長い場合も短い場合もありますが、いずれにしてもこういう話し方でないと話はしていけない。もしそれがA群のような話し方だったら、「私はあああわわわ」というような感じで、ずっと続いて話す、そんな状況にあるというのが、ある意味でA群なのです。

先程から字余りを考える場合はどうしても音声というものを考えていかなければならないと言っております。もしも字余りは定型を破っているのだということを主張する人がいてそれで論が成り立つのであれば、音声の方まで考えなくてもいいわけです。母音を含む句ばかりが2,000ほど定型を破っているのだと、それが主張できれば、それはそれで成り立つのだと。しかし私はそうではないと思います。そういうことで、音声というものも考えていかなければならないということです。

更にもう一つ問題なのですが、３ページの十二、「『自立語＋母音から始まる自立語』・・・A群において字余り」という所です。ここをよく考えてもらいたいと思うのですが、A群においてほとんどが字余りだという場合に、どういうものが字余りになっているかといいますと、それは「自立語＋母音から始まる自立語」です。よく知られた例を挙げてみました。（１）の「うらうらに　照れる春日に　比婆理安我里（ひばりあがり）　心悲しも　ひとりし思えば」（19・4292③）。三句目の六文字になった所です。A群であります。第一句目、三句目、五句目は、字余りをほとんど生ずるというA群です。（２）も結句の五句目であってA群です。「都辺に　立つ日近付く　飽くまでに　相見て行かな　故布流比於保家牟（こふるひおほけむ）」（17・3999⑤）、私が今「こふるひ・おほけむ」というようにちょっと音の途切れを入れて発音しましたが、そういう発音ではなかっただろうということです。だから字余りだということであります。普通「こふるひ・おほけむ」という感じですが、そこが「こふるひぉほけむ」のごとくであって、字余りになっているのです。それから（３）は、「咲く花は　宇都呂布等伎安里（うつろふときあり）　あしひきの　山菅の根し　長くはありけり」（20・4484②のA群）、先程もちょっと挙げましたが、これは二句目ですが、五音節目の第二母音以下の例で、A群であります。「うつろふとき・あり」ではなくて、A群ゆえの「うつろふときぁり」であって、字余りというわけです。（４）も、「我が手本　まかむと思はむ　ますらをはをち水求め　白髪生二有（しらかおひにたり）」（４・627⑤）、この例は訓字であり、訓字をこういう場合に取

り入れていいかという問題もあるのですけれども、一応、確実にそう読めるという例として挙げました。「白髪」は自立語であり、この自立語に「生二有」という「おふ」が位置するのですが、これも普通「しらが・おひにたり」ですが、字余りを生じているわけです。それから（5）、「あをによし　奈良の都に　たなびける　天の白雲　見礼杼安可奴加毛」（15・3602⑤）の、「見礼杼安可奴加毛」。あるいは（6）の結句「安礼波伊可尓勢武」、（7）「蓋相牟鴨」がその例であります。この場合に、現代語を援用しながら、特に服部四郎・亀井孝両氏等の言われるアポストロフィエスを考えに入れますと、こういうことなんだろうと思います。自立語に自立語が続く場合（(1）～（4))、我々は普通の発話の場合には、「ひばり・あがり」、「あ」というのははっきり発音しています。即ち、「ひばり」という自立語と「あがる」ということを発音しようとするとき、「ひばり・あがり」となります。これが（a）グループでは「ひばりゃ」という、こんな感じなんですね。「ひばりぁがり」、「りぁがり」という感じにおいて字余りになっているということです。自立語と自立語とは、「ひばり・あがり」、「あ」という子音音素が入っていて普通だと考え得るのですが、しかしながらこのようにA群では、歌特有、歌ゆえにと言ってよいかと考えられますが、全部がこういうかたちで連なっているというわけです。

実は、句中に母音が入っているから字余り・非字余りというかたちで、音の途切れのあるなしが象徴的に表われているわけです。母音が入っていなくても恐らくA群、というのは音の途切れがなく一続きに発音されたのだと考えられます。つまり、母音が入っているから字余りとか非字余りが分かるのですけれども、母音がなくても、そこが一続きか音の途切れがあるかというのは、母音が入っているものから想定することができるわけです。一句目、三句目、五句目のA群は、ずっと一続きで発音されていた、音声上そういう状況にあったのだろうということです。母音が入っているものは字余りとしてそれが表れているというわけです。今の例「ひばりあがり」が、恐らくこれを「ひばりぁ」、「りぁ」というのは普通の発音、日常の会話ではない、現在でもそうですし、当時もないだろうと考えられます。しかし、「うらうらに　てれるはるひに　ひばりぁがり」という感じで詠まれたということになります。アクセントはちょっと別で分からないのですが。それから（2）にしましても「こふるひ」と、「おほけむ」の「お」との間はアポストロフィエスの有声喉音音素のない「ひぉ」という、「こふるひぉほけむ」というような感じです。そういうかたちで歌われていく。「うつろふとき・あり」は、「うつろふときぁり」という感じ。当時の音声を復元することができませんし、ないものを探るのも難しいのですが、今言った「きぁ」というのがどんな発音だったかというのはまた別に考える必要がありますが、一続きだったということになります。このように自立語＋自立語というものは、普通、音が一緒になって融合することがないのに、それが歌ゆえに存在した。その点を裏付けることとしまして、「比婆理安我里」というような所においては決して脱落はありません。「ひばらがり」とか、「ひばりがり」というような、そんなかたちで出てくることは、

まず歌の上においてもありませんし、散文においてもありません。これは歌ゆえに、この一続きという現象が起こり、一般には起こらないゆえにこういうところが字余りになるけれども、脱落は起こらないということです。A群だけに起こる字余りには決して脱落はない、簡単に言えばそういうことです。「ひばりあがり」が、「ひばらがり」や「ひばりがり」というようになることはない。これは重要なことであります。歌ゆえに臨時に、私は特に臨時にという言葉を使いますが、臨時に一続きになったところ、A群というのはそういうところにおいて字余りになっているのだと考えるわけであります。このことと関連して、もう一つ、是非見ておきたいと思いますのが４ページの十五の「字余りの現れ方②」、A群とB群であります。更に以上のことを考えるために十六をみます。十六、「B群・・・句中に切れ目がないもの、切れ目が一ヵ所、または二ヵ所のもの」。A群は何しろ切れ目がなくずっと一続き。それに対してB群では句中の切れ目がないものもあり、字余りのものもあります。（２）、「ひなにあるわれを」は切れ目がないものです。それから切れ目が一ヵ所のもの、これは非字余り。また、二つ母音を含んでおりながら七文字のままというのは切れ目が二ヵ所あるという現象だと考えてよいと思います。その例をちょっと順番に挙げてみます。

まず４ページの下のほう（１）。これは切れ目なしという例を挙げました。重複するのもあるのですが挙げておきました。一番最初の例、「鶏が鳴く　東をさして　ふさへしに由可牟等於毛倍騰（ゆかむとおもへど）　よしもさねなし」（18・4131④）というこれは、「ゆかむとおもへど」は切れ目がないと考えられ、それゆえに字余りだということになります。「とお」というのが切れ目がない。それから先程の例、「比奈尓安流和礼乎（ひなにあるわれを）」、これも切れ目がありません。B群には一方でこのように切れ目のないものがあって、それが字余りとなります。その字余りは、「おもふ」とか「ある」とか「いふ」とか、また「いづ」を後項にもつ複合語というものです。それに対して、一方、５ページの、（３）、「秋萩に　恋尽くさじと　思へども　思恵也安多良思（しゑやあたらし）　またも逢はめやも」（10・2120④）、（４）「天地の　可美乎伊乃里弖（かみをいのりて）　さつ矢貫き　筑紫の島を　さして行く我は」（20・4374②）は非字余りであり、切れ目が一ヵ所だという例です。（４）の例から見ますと、「可美乎伊乃里弓」は「かみをいのりて」の「い」が有声喉音音素の落ちた「い」ではなくてしっかりした「い」、有声喉音音素という子音をもった「い」と考えられます。これは音の途切れがあるうえに、その途切れが長いか短いかという問題もありますが、一応短くてもその音の途切れがあって「い」がしっかり発音される。それが最も分かりやすいのは（３）の例で、「思恵也安多良思」。先程から「しゑや」というのを挙げていますがこれは感動詞です。「しゑや」は「何とまあ」とか、そんな言葉の感動詞。感動詞というのはこれは現代もそうですし、それは通時的に見ても基本的に独立する言葉です。「おや」、「まあ」というような感動詞というものは、次の文節とそんなに続かない。この場合も、所謂感動詞の「しゑや」とあとの「あ」との間には音の途切れがあって「しゑや・あたらし」と示し得る。切れ目は一

ヵ所ということになります。更に（5）「まそ鏡　見不レ飽妹尓（みあかぬいもに）　逢はずして　月の経ぬれば　生けりともなし」(12・2980②)、（6）「～やすみしし　我が大君　秋の花　之我（しが）色々尓（いろいろに）　見したまひ～」(19・4254、長七)、（7）「～玉の緒の　不レ絶射妹跡（たえじいいもと）　結びてし　ことは果たさず～」（3・481、長七）と挙げました。これらは切れ目がどのぐらいあるのかといった問題もありますが、少なくとも字余りを生じないという意味で考えると、（5）の「見不レ飽妹尓（みあかぬいもに）」、これは「あ」と「い」が含まれていて、その二母音はどちらもB群に位置しております。この場合、「あ」でも字余りを生じておらず「い」でも生じていない故に、これは七文字というふうに考えられます。その場合に、たとえば「目」「絵」という一音節語がよく関西では「めぇ」とか「えぇ」とか、特に名詞ですが長く発音される。あるいはそういうこともかかわるかどうか、「みぃ・あかぬ・いもに」というような発音、即ち「あ」と「い」がいわゆる子音音素を持っており、切れ目が二ヵ所あったということであります。こういう場合に、萬葉集というのはすべてが仮名書きではありませんので、これなども本当にそう訓むのかという問題も一方にあるわけですが、従って、今後も訓みの検証が必要であります。少なくともこの例はこの訓みで誤りないでしょう。（6）番目も「秋の花　之我色々尓」、この場合も「しが・いろ・いろに」であって、「赤々」（'aka'aka）と同じような状況にあるとみてよいかと考えられます。「い」は有声喉音音素を有しているというふうに考えてよいでしょう。次の（7）も、母音を二つ含んでも七文字という例です。（7）には「い」という面白い助詞があります。「たえじいいもと」。強調の「い」、こういう場合も「い」が非常に強く発音されることがあったか。切れ目は二ヵ所であり、「い」はどちらも子音音素を持っていると考えられます。十七で記しているのはA群のことであり、このA群のものはいずれも句中には切れ目がないということです。

これを踏まえて最後のページの「まとめ」に入るのですが、私は一方で、書記されたもので考えていきたいとも思っていました。しかし、それだけではなかなか究明できないところがあるということで踏み込んで考えてきました。少なくとも現在は次の「まとめ」のように考えております。

B群というのは短歌第二・四句の五音節目の第二母音、B群は句中に母音を持たないものをも含めて、恐らく一続きのものもあれば切れ目が一ヵ所、あるいは二ヵ所のものもあるというあり方、母音がそれを象徴的に文字の上で示してくれている、母音を含む句はそうした在りようを字余りと非字余りという文字数の異なるかたちで象徴的に示していると受け止められます。句中に母音を含まないものも、母音を含む句から想定することができます。ここで、次のような一般の発話についても考えてみますが、一般の発話においても、たとえば文節と文節とは一続きで発音される場合もあれば、切れ目を持ち一続きではない場合もある。その意味でB群の在りようはあとで見るA群よりも一般の発話に近いものがあったかと推定されます。母音に関して言えば、母音は一般の発話と同じく前の音節と一体化するものもあれば、前の音節とは独立したものもあったと、このようにB群を捉えて

よいかと考えます。

それに対してA群、短歌第一・三・五句、そして（b）グループの第二句と第四句の五音節目の第二母音以下、母音を含めば90パーセント以上が字余りでありますが、それらの母音は、結局何を意味しているかといえば、常に前の音節と一体化されている、あるいは一体化されたかたちでしかあり得なかったというわけです。この場合も、A群というのは句中に母音を持たないものをも含めてほとんどが常に切れ目のない一続きのものであったということです。母音を含むものからして、そのように考え得ることができます。

今まで述べてきたことをまとめて言いますと、句中に母音を含むとB群は切れ目があって一続きでない母音、そうした母音は上に挙げた現代の発音で言えば、簡単に現代のものと比べていいかというそしりはあるかというように思いますし、十分にもっと考えていくべきだろうと思いますが、結局言語というものはその時代で大きく変わるものと、あるいは音声の上でも変わらないものとがある。その意味で現代のものを応用することも可能かと考えられます。服部四郎氏、亀井孝氏等の考えを援用しますと、前に挙げた現代の発音で言えば、結局このB群というのは「赤々」の「あ」のような、あるいは「小鬼」の「お」のような発音であり、切れ目があって一続きでない、そのB群での母音はそういう子音を持った母音であったと。しかもその時の切れ目は一ヵ所のものが多いのですが、二ヵ所のものもあるという次第です。また一方、切れ目がなく一続きで字余りとなるものもこのB群には存在するわけであり、その場合の母音としては、先程の「お母さん」の三音節目の「あ」とか、あるいは、「航空」の二音節目、四音節目の「お」や「う」のような発音であったと想定できるであろうということです。すなわちB群の母音は「赤々」の「あ」、あるいは「お母さん」の「あ」など両者の母音が存在したと、こんなふうに捉えてよいでしょう。それに対して、ほとんどが字余りをきたすA群の母音というのは前の音節と合して一音節となる故に字余りなんですが、前の音節と常に合して一音節となる故に、A群には「赤々」の一音節目や三音節目の「あ」とか、「小鬼」の「お」のような母音はない。ほとんどが「お母さん」の「あ」、三音節目の「あ」とか、あるいは「航空」の先程挙げた二音節目、四音節目の「お」や「う」のようなそのような発音ばかりで行われていたということになるのであろうというところまで考えを進めました。一般の発話が一続きや切れ目があるとすれば、A群とB群のうち、少なくとも比較の上でのことですが、一般の発話が当時も切れ目もあれば一続きもあるというような、そのような発音であったと想定すれば、A群とB群のうちB群の方がどちらかと言えばそうした一般の発話に近いものであったと言えるでしょう。一方、文節と文節とがいつも切れ目なく一続きで発音されるような状況は、通常の発話では考え難い。しかし、そうした在りようがA群の在りようなのです。今見てきたように、A群の在りようであってみれば、それ故に、A群は一般の発話からは少し離れた所にあった、そんな状況ではなかったのかと把握してよかろうと考えるわけです。

私は長年、字余りについて深く考えてきました。まず、本居宣長によって中世とは違う捉え方がされ、はじめて語学的といいますか、そういう面からアプローチするようになった。それは後学の者には大変な恩恵であり、そうでないような状況からは今までお話をしてきたような問題を深めていくことは困難だったであろうと思います。そしてまた、宣長は簡単に母音を含むものに限るという言い方をしておりますが、私が一番最初に字余りのことを考えた時に、「確かに母音を含むのだけれども、含んだものがすべて字余りになるわけではない」という辺りに甚だ興味をおぼえ、字余りになるかならないかは、切れ目があるか一続きかという問題と関わるのであろうと考えはじめました。そういうことを基にしまして、実際見ていきますと、先程の「しゑや」という例があり、そういうところには字余りがない、その辺で一続きとか切れ目という問題が介在しているのであろうということを突き詰めてきました。更に見ていきますと、それよりも更に厄介なA群、B群という問題も出てきました。それをどのようにうまく整合的に説明できるかという問題についてずっと考えてきまして、また部分的に修整を加えてなければならないところもあるかもしれませんが、以上、お話ししたようなことを今、考えております。

90分ということでしたので、以上で終わらせていただきます。どうもご清聴ありがとうございました。

## 質疑応答

**毛利 正守**　質問は受けませんが、あるいはもし、どうしてもということで……、はい、ではお願いします。

**神野志 隆光**　どうしてもということで、少し今までお話ししておられた関係で確認したいというか、お伺いしたいというか、いくつかあります。タームとして、たとえば五音節目の第二母音以下であるとか、五音節目の第二モーラ以下とか、それからもう一つは単語連続・単語結合体というそういう見方で、タームで、今まで問題を把握していたのに対して、今回のこの中で、もう少し前からなんですけれども、別の用語で問題を把握しているようなかたちで描かれている。最後までお伺いして説明をお聞きすると、多分こういうふうに考えてよろしいかという、多分この問題を説明するまでにこの母音の現象として、たとえば今もまとめにあったとおりですけれども、そういう現象として一般の発話とか、そういう言葉を交えて説明した。そういう母音の現象として考えるということが、その術語の変更をもたらしたのかなと思いながら聞きましたけれども、そういうふうに受け止めてよろしいのでしょうかというのが、最初に聞きながら、今まで読み続けてきた者として、そういうかたちで術語をもう一度使い直したかたちでお考えになるということでお考えになっているんでしょうかということがお聞きしたかったことです。

**毛利**　はい、ありがとうございます。私が字余りについて一番最初の論文を書きましたのは、『萬葉』の100号でした。拙論が原稿用紙100枚以上というような長いもので、今までには載らなかった分量のものでしたが、ちょうど芳賀さんが編集長の時だったかと思いますが、芳賀氏もこれはその量でもいいだろうということで編集委員を説得して下さった。そして100号に掲載されたという経緯があります。その時の題目が「萬葉集における単語連続と単語結合体」でした。

実は今の点でこういうことを取り入れていくことにおいて、術語というものを省いていったのかというようなところを言っていただきましたが、まず今日のことで言いますと、その単語連続・単語結合体という言葉を使うと、それだけでまた時間を費やしてしまうという問題もありまして、その術語を使わなかったということが一つあります。

この単語連続と単語結合体というのは何に基づいているかといいますと、やはり服部四郎氏の『言語学の方法』であります。私としましては基本的にそれはその捉え方でよいと思っています。つまり、今日言いました一続きというのを単語結合体、そして、途切れがあるものが服部四郎氏は単語連続と述べておられる、その連続という言葉と結合体、連続がいかにも続いているようなので、ちょっとこの言葉がふさわしいかどうかという問題があるのですが、服部四郎氏が言われるのはやはり一続きのものを単語結合体、そして音の途切れのあるものを単語連続と言っておられますので、その言おうとすることはそんなに

掛け離れていないということがあります。

その場合に、もう一つ臨時という言葉を使って説明する必要が出てくることが萬葉集の場合にあります。それはA群であります。恐らくは単語結合体ではない普通の発話という言葉を使えば、普通の発話ではないような、そんな状況でも字余りになっている。特にA群は母音を含めばほとんどが字余りなのであり、そういう状況において、その単語結合体という言葉をもう少し臨時的なとかという言葉を使っていかなければならないと、それの説明がどうしても必要になってくるので今回は特にもっと分かりやすい言葉で説明するということがありました。

それと、一番最初の論文で確かに五音節目の第二モーラという言い方をしました。これにつきましてモーラというのを母音という言い方に変えました。これには山口佳紀さんと話している時に、山口さんと上代の時期にモーラという言葉を使っていいものかというようなことで議論しあったことがあります。私は山口さんの言われることをなるほどと思った点と、もう一つ私自身、文字を用い始めてからはこの口頭だけでない、口頭の場合はまた別にして、文字を持つということにおいて、モーラ化が起こってきているのではないかという点も少し考えていますので、あるいは五音節目の第二モーラでもいいのかとか、その辺は更にもっと考える必要があろうかと思っています。が、今はそれを訂正した五音節目の第二母音という言い方のほうが無難でありますし、それでそのように使っていますが、これからはシラビームとモーラという概念で、上代はどうだったのかという点を更に追究していきたいと考えています。

文字を持つということ、あるいは萬葉仮名を持つということがどういうことか、その辺がモーラ、現在の言語はモーラ言語だとよく言われるのですがシラビームが基にあるわけですけれども、モーラ言語だと言われている。その時に上代は一体どうだったのかという問題を更に考えていく必要があろうというふうに思っています。

何しろこのように文字化した時に五文字のところを字余りということで六文字として記すことにおいて、当時の人はこれは五音なのに六字で書くということをどのように認識していたのか、意識はどうであったのかとか、音声では一音節になっているのをこういうふうに書いてしまうことはどういう意味を持つのかといった大きな課題があります。その辺り、私はまた一方で、日本人が文字を発明しなかったという問題とこのことはかかわっていると考えています。これはコメンテーターとして前日お話ししたそのことと大いにかかわり問題になるかと考えているのですが、そういう広い問題としては、更に更に深めていきたいと考えています。

恐らく神野志さんはもっと質問したいことが多いのだろうと思います。が、今のところ、それでよろしいでしょうか。

**神野志**　まだあるんですが……。

**毛利**　はい。結局一つのことを究明しようと思いますとなかなか難しい。しかし私は、現

在のところ、今お話ししましたように、全部皆さんに伝わったかどうか分かりませんが、こんなふうに考えているわけです。私が字余りを始めてどのぐらいか、字余りばかりやっているわけでもありませんが、「毛利のモーラ」とか何かいろいろ言われたりしました。そういうことで、私の大きなテーマの一つを今日はお話しさせていただいたということであります。

## 資料

一、句中の母音（V）・・・字余りと非字余り

(1)鶏が鳴く　東をさして　ふさへしに　由可牟等於毛倍騰（ゆかむとおもへど）　よしもさねなし

(18・4131④)

(2)秋萩に　恋尽くさじと　思へども　思恵也安多良思（しゑやあたらし）　またも逢はめやも

(10・2120④)

二、句中の「子音＋母音」（CV）・・・非字余り

(1)うちひさす　都の人に　告げまくは　見し日のごとく　安里等都気己曾（ありとつげこそ）

(20・4473⑤)

(2)我が背子が　来むと語りし　夜は過ぎぬ　思咲八更々（しゑやさらさら）　しこり来めやも

(12・2870④)

三、句中の「半母音＋母音」（V）・・・字余りあり

(1)伊弊尓由伎弖（いへにゆきて）　いかにか我がせむ　枕づく　つま屋さぶしく　思ほゆべしも

(5・795①)

(2)我が背子は　玉にもがもな　ほととぎす　声にあへ貫き　手尓麻伎弖由可牟（てにまきてゆかむ）

(17・4007⑤)

四、橋本進吉『国語音韻の研究』（「国語の音節構造と母音の特性」）

(1)字余りを生じる際の母音は一つの音節として十分な重みをもっていなかった。

五、

(1)萬葉集中、字余りを生じるのは、その大部分が句中に母音(V)を含む場合。

(2)次に字余りになりやすいのは、句中に半母音(S)を含む場合。

(3)「子音＋母音」（CV）ばかりの句は、基本的に字余りなし（非字余り）。

六、

(1)子音の音素が弱化されていくほど字余りになりやすく、また、字余りを生じる母音は、一つの音節としての重みを持っていなかったと言える。

七、服部四郎『言語学の方法』（岩波書店、昭43）

(1)[aka]/'aka/（赤）喉頭有声子音音素/'/（/'V/）

(2) [akaaka]/'aka'aka/（赤々）

(3) [kooni]/ko'oni/（小鬼）

(4) [ko:ku:]/kookuu/（航空）

(5) [oka:san]/'okaasaN/（お母さん）

八、亀井孝「国語の変遷と歴史」（『国語学』17、昭29、8）

(1) 亀井孝氏もア行音をハ行音と対立させて服部四郎氏と同様の見解を提示している。

九、字余りと脱落形

(1) 天離る　比奈尓安流和礼乎（ひなにあるわれを）　うたがたも　紐解き放けて　思ほすらめや

（17・3949②）

(2) ～玉鉾の　道はし遠く　関さへに　敝奈里氐安礼許曾（へなりてあれこそ）～

（17・3978、長七）

(3) 鶏が鳴く　東男の　妻別れ　可奈之久安里家牟（かなしくありけむ）　年の緒長み

（20・4333④）

(4) 我が背子が　夜度奈流波疑乃（やどなるはぎの）　花咲かむ　秋の夕は　我を偲はせ

（20・4444②）

(5) 梅の花　佐吉多留僧能々（さきたるそのの）　青柳は　縵にすべく　なりにけらずや

（5・817②）

(6) 世の中は　空しきものと　知る時し　いよよますます　加奈之可利家理（かなしかりけり）

（5・793⑤）

十、上代散文の脱落形

(1) 復可受賜物奈利世波　（宣命、第26詔）

(2) 狂迷逼流頑奈留奴心　（宣命、第16詔）

(3) 兵起尓被雇多利志　（宣命、第21詔）

(4) 顕久出多留宝尓　（宣命、第4詔）

十一、九の字余りに対して、一方で非字余りあり

(1) 堀江より　朝潮満ちに　寄るこつみ　可比尓安里世婆（かひにありせば）　つとにせましを

（20・4396④）

(2) 障へなへぬ　美許登尓阿礼婆（みことにあれば）　かなし妹が　手枕離れ　あやに悲しも

（20・4432②）

十二、「自立語＋母音から始まる自立語」・・・A群において字余り

(1)うらうらに　照れる春日に　比婆理安我里（ひばりあがり）　心悲しも　ひとりし思へば

(19・4292③)

(2)都辺に　立つ日近付く　飽くまでに　相見て行かな　故布流比於保家牟（こふるひおほけむ）

(17・3999⑤)

(3)咲く花は　宇都呂布等伎安里（うつろふときあり）　あしひきの　山菅の根し　長くはありけり

(20・4484②のA群)

(4)我が手本　まかむと思はむ　ますらをは　をち水求め　白髪生二有（しらかおひにたり）

(4・627⑤)

(5)あをによし　奈良の都に　たなびける　天の白雲　見礼杼安可奴加毛（みれどあかぬかも）

(15・3602⑤)

(6)人の植うる　田は植ゑまさず　今更に　国別れして　安礼波伊可尓勢武（あれはいかにせむ）

(15・3746⑤)

(7)百足らず　八十隅坂に　手向けせば　過ぎにし人に　蓋相牟鴨（けだしあはむかも）

(3・427⑤)

十三、字余りの現れ方①

(a)グループ　短歌第一句・第三句・第五句

(b)グループ　短歌第二句・第四句

十四、(b)グループの「五音節目の第二母音」の前後

「五音節目の第二母音」以前〈非字余り〉

(1)この川に　安佐菜安良布児（あさなあらふこ）　汝も我も　よちをそ持てる　いで子賜りに

(14・3440②)

(2)剣大刀　いよよ研ぐべし　古ゆ　佐夜気久於比弖（さやけくおひて）　来にしその名そ

(20・4467④)

(3)ま幸くて　伊毛我伊波伴伐（いもがいはばば）　沖つ波　千重に立つとも　障りあらめやも

(15・3583②)

(4)君を待つ　麻都良乃于良能（まつらのうらの）　娘子らは　常世の国の　海人娘子かも

(5・865 ②)

(5)しましくも　比等利安里宇流（ひとりありうる）　ものにあれや　島のむろの木　離れてあるらむ

(15・3601②)

(6)梅の花　知良久波伊豆久（ちらくはいづく）　しかすがに　この城の山に　雪は降りつつ

(5・823②)

(7)天地の　可美乎伊乃里弖（かみをいのりて）　さつ矢貫き　筑紫の島を　さして行く我は

(20・4374②)

(8)年にありて　比等欲伊母尓安布（ひとよいもにあふ）　彦星も　我にまさりて　思ふらめやも

(15・3657②)

「五音節目の第二母音」以下〈字余り〉

(1)隠り沼の　之多由孤悲安麻里（したゆこひあまり）　白波の　いちしろく出でぬ　人の知るべく

(17・3935②)

(2)隠り沼の　下の恋ひ余り　白波の　伊知之路久伊泥奴（いちしろくいでぬ）　人の知るべく

(17・3935④)

(3)薪伐る　鎌倉山の　木垂る木を　麻都等奈我伊波婆（まつとながいはば）　恋ひつつやあらむ

(14・3433④)

(4)松浦川　多麻斯麻能有良尓（たましまのうらに）　若鮎釣る　妹らを見らむ　人のともしさ

(5・863②)

(5)咲く花は　宇都呂布等伎安里（うつろふときあり）　あしひきの　山菅の根し　長くはありけり

(20・4484②)

(6)大君の　命恐み　妻別れ　可奈之久波安礼特（かなしくはあれど）　ますらをの～

(20・4398、長七)

(7)人妻と　安是可曾乎伊波牟（あぜかそをいはむ）　然らばか　隣の衣を　借りて着なはも

(14・3472②)

(8)年にありて　比等欲伊母尓安布（ひとよいもにあふ）　彦星も　我にまさりて　思ふらめやも

(15・3657②)

十五、字余りの現れ方②

A群　短歌第一・三・五句、及び短歌第二・四句の「五音節目の第二母音」以下の箇所

[字余りは約１４７６例、非字余りは８５例]

B群　短歌第二・四句の「五音節目の第二母音」以前の箇所

[字余りは約２４１例、非字余りは１１８９例]

十六、B群・・・句中の切れ目がないもの、切れ目が一カ所、または二カ所のもの

(1)鶏が鳴く　東をさして　ふさへしに　由可牟等於毛倍騰（ゆかむとおもへど）　よしもさねなし

(18・4131④)

(2)天離る　比奈尓安流和礼乎（ひなにあるわれを）　うたがたも　紐解き放けて　思ほすらめや

(17・3949②)

以上、切れ目なし

(3)秋萩に　恋尽くさじと　思へども　思恵也安多良思（しえやあたらし）　またも逢はめやも

(10・2120④)

(4)天地の　可美乎伊乃里弖（かみをいのりて）　さつ矢貫き　筑紫の島を　さして行く我は

(20・4374②)

以上、切れ目、一カ所

(5)まそ鏡　見不レ飽妹尓（みあかぬいもに）　逢はずして　月の経ぬれば　生けりともなし

(12・2980②)

(6)～やすみしし　我が大君　秋の花　之我色々尓（しがいろいろに）　見したまひ　明らめたまひ～

(19・4254、長七)

(7)～玉の緒の　不レ絶射妹跡（たえじいいもと）　結びてし　ことは果たさず～

(3・481、長七)

以上、切れ目、二カ所

十七、A群・・・いずれも句中に切れ目なし（十一の(1)～(7)参照）

まとめ

B群は、句中に母音を持たないものをも含めて、一続きのものもあれば、切れ目が一ヶ所のもの、あるいは二ヶ所のものもあるという在りようであった。母音を含む句は、そうした在りようを字余りと非字余りという文字数が異なるかたちで、象徴的に示していると受けとめられる。一般の発話においても、たとえば文節と文節とは一続きで発音される場合もあれば、切れ目をもち一続きではない場合もある。その意味でB群の在りようは一般の発話に近いものがあったかと推定される。母音に関して言えば、B群は、一般の発話と同じく、前の音節と一体化（一音節化）するものもあれば、前の音節とは独立したものもあったということである。

対して、A群は母音を含めば90%以上が字余りであるので、それらの母音は、つねに前の音節と一体化されている、あるいは一体化されたかたちでしかあり得なかったという訳である（なお、A群は、句中に母音を持たないものをも含めて、ほとんどが切れ目のない一続きのものであったと考えられる）。

今までに述べてきたことをまとめて言えば、句中に母音を含むと、B群は、切れ目があって一続きではない母音、そうした母音は、上に挙げた現代の発音で言えば、/'aka'aka/（赤々）の/'a/や/ko'oni/（小鬼）の/'o/のような発音であったと言え、しかもそのときの切れ目は一ヶ所のものが多いが、二ヶ所のものもあるという次第であり、また一方、切れ目なく一続きで字余りとなるものもこのB群には存在するので、その場合の母音は、/'okaasaN/（お母さん）の/a/や/kookuu/（航空）の/o/、/u/のような発音であったと想定される。即ち、B群の母音は、「赤々」のアや「お母さん」のアなど両者の母音が存在したことになる。

それに対して、ほとんどが字余りをきたすA群の母音は、前の音節と合して一音節となるゆえに、A群には、「赤々」の一・三音節目のアや「小鬼」のオのような母音はなく、ほとんどがつねに、言わば「お母さん」の三音節目のアや「航空」の二・四音節目のオやウのような発音ばかりで行われていたということになるのである。

一般の発話が一続きや切れ目があるとすれば、A群とB群のうち、B群のほうがどちらかと言えばそうした一般の発話に近いものであったと言え、一方、文節と文節とがいつも切れ目なく一続きで発音されるような状況が通常の発話では考え難く、しかしそうした在りようがA群の在りようであってみれば、それゆえにA群は一般の発話からは少し離れたところにあったと把握して誤ることはないであろう。